

ドイツ語舞台語発音法における基本的概念と、具体的指導法における考察

田中 奈美子

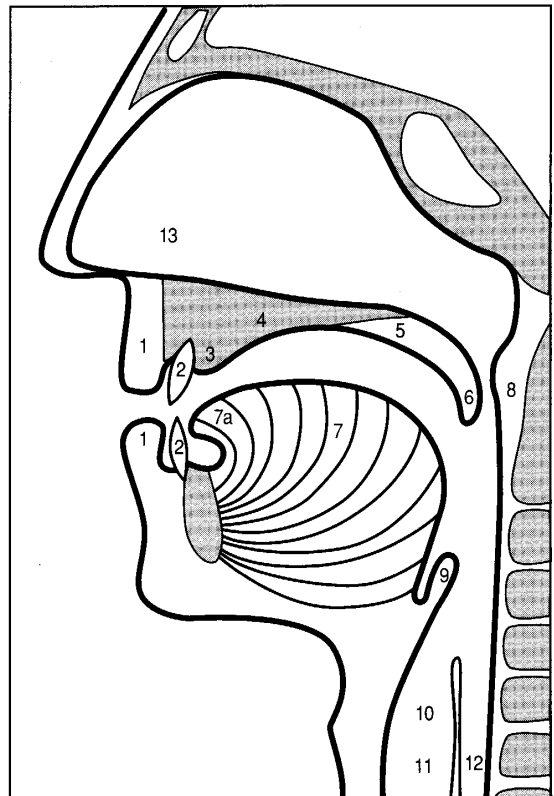
Namiko Tanaka

序：

現在各教育機関で、Sprecherziehung—舞台語発音法、話術教育法、ドイツ語歌唱法、等の訳語をもって、個々に授業体制を持ち、又、近年は、それについての著作物も、出版され、以前より正確で、緻密な指導が行われているが、著作物で判明するのは、舌、唇、口腔内、外の形態、形骸、及び、形式のみであり、発音において、非常に重要な要素である、息の送致及び、分量とその時間的なバランスについては、一語一語微妙な相違があり、それを書物として記し網羅する事は、膨大な量となり、不可能に近く、多くは記されていないのが、現実である。長年、大学及び外部での公開講座等でドイツ歌曲の指導の経験を通し、今回は、具体的な凡例をあげ、典型的なもののみについて記す事とする。機会があれば、より詳細な例を、もって、記したいと考えている。

1 Sprechwerkzeug 発語器官

- 1 唇 (Lippen)
- 2 歯 (Zähne)
- 3 歯ぐき (Zahndamm)
- 4 硬口蓋 (Harte Gaumen)
- 5 軟口蓋と口蓋帆 (Weicher Gaumen und Gaumensegel)
- 6 口蓋垂 (のどひこ (Zäpfchen))
- 7 舌 (Zunge) 7a 舌尖 (Zungenspitze)
- 8 咽頭壁、隆起 (Passavantscher Wulst)
- 9 口喉頭蓋 (Kehldeckel)
- 10 声帯・声門 (Stimmklappen oder Stimmbänder mit der Stimmritze)
- 11 気管 (Luftröhre)
- 12 食道 (Speiseröhre)
- 13 鼻腔 (Nasenraum)



2 Artikulationsgebiete 発音領域

●Verschlusslaute (Explosivlaute)

閉鎖音 (破裂音)

無声・有声

1 p 1 b

2 t 2 d

3 k 3 g 軟口蓋音

●Engel-laute (Reibe-laute)

障害音 (摩擦音)

無声・有声

2 f 2 v

2 s 2 z

3 sch 3(i)ch d(a) 4 ch

●Sananten

鳴音

無声・有声

1.m 2 n.l.r 4 ng

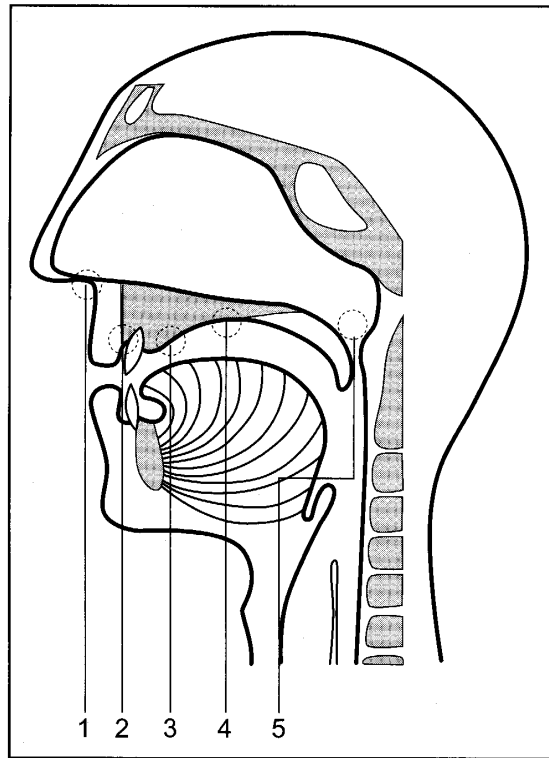
●Hauchlaut

氣息音 (声門音)

無声

5.h

Lautgruppe		Aryikulationsgebiete				
		1	2	3	4	5
Verschlusslaute (Explosivlaute)	閉鎖音 (破裂音)	b p	d t	g k		
Engelaute (Reibelaute)	障害音 (摩擦音)		f,w s,ss	sch chj	(a)ch	
Sananten	鳴音	m	n l,r		ng(r)	
Hauchlaut	氣息音 声門音					h



3

序で記したように、前記の発音のための、形態、様式を図解とドイツ語表記と共に示したが、以上の他、各々の母音 Vocal 子音 Konsonanten 変母音 Umlaut においても、各、一語一語具体的な位置が、記されなくてはならないが、現在・辞書に、記載されている事が多い為、指導の為の具体的な例のみとする。

ドイツ語発音の特徴的な要素の一つが、Umlautである。

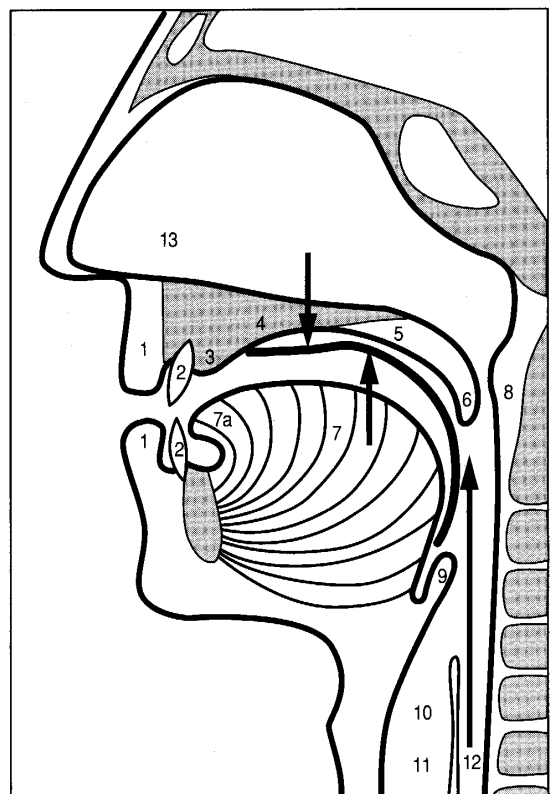
日本で、発音指導をされて送りだされた場合、O、Uの発音の際、唇に意識を集めて、発音させる場合が多く、ドイツ語圏での勉強を始動させる折、Knödel (ドイツ料理の団子、さらにそれを団子声と称する) と言われ、一から、やり直さなくてはいけない場合が、多く発生する。その原因は、唇に力が入りすぎ、その影響で声帯付近の筋肉が固くなり、その結果、ドイツ人

が日本人の発音について言及する折、必ずと言っていい程、評される Knödel (前述) あるいは UmlautJapanischer Art (日本風ウムラウト) Pseudo Umlaut (作り物、偽物ウムラウト) といった事態が生じてくるのである。

小ホールやサロンなどで演奏する場合であれば、この方法でも、奇妙な発音色ではあるが、ある程度、発音されるが、2000人以上の大ホールでのオペラ公演となれば、致命的に、この発音体制では発音、発声も大幅に制限され、フレーズの中で、響きを保ち、発音と共に共鳴するものと、舞台上で、落ちてしまう音との落差の中、擦過音のみが、耳障りな程の音楽となってしまうのである。指導者自身が、大ホールでの演奏経験を通し体得したものを、必ず、実践を供って、論理のみを強要せず、指導していかななくてはならない。それがなされない場合、また正しい発声技術を持っていない場合、非常に危険な方向へと受講者を導いていく事となるのである。どんな言語も、舞台上で発音されるものは、正確な形式、型、形態を知り得なければ、美しい、自然な発音へと導びき得ないが、大きな空間の中での発音発声は、基本的に、共鳴器官の高い位置に、深い息のポジションから送られたものが、響きとして保たれていなくては、基本概念を、正確に把握していても、全く意味をなさないのである。もう一つの重要なポイントは、欧米人と、日本人の口腔内の広さの相違である。言語の発音から、このような問題が、発生してきたと思われるが、日本語の場合、表現自体も、全体に柔らかく、曖昧で、発音自体も、口腔内の開口、狭窄、舌、唇、の動作なども絶体的に、必要とされるものは、ほとんどと言っていい程、ないに等しいのである。

その為に、開口音、閉口音の区別も仲々困難な事となり、発音の為の意識が、舌根の上昇や、固さとなり、また、硬口蓋、軟口蓋の位置も、下垂している為、全体的な口腔内の狭窄の為、気道からの息の送致も、大幅に制限され、異常音に近いものを発生させる結果となる。

7舌、舌根の上昇4、5、軟口蓋、硬口蓋の下垂気道からの息の送致、以上、口腔内での問題であるが、もう一つ重要な事は、顔面の筋肉、唇、舌の運動量の少なさである。日本人は、欧米人と比較すると顔の表情が乏しいといわれるが、この事も、発音に、大きく関る課題である。



4 トレーニングの方法

1唇：破裂音、無声音有声音

例・P、B同型の発音形態を、腹式呼吸を供い、ゆっくりと一音一音、子音のみで、無声P、有聲Bを、繰り返しさせ、正しい形態を供ってきた場合、息の送致の速度を上げてゆく、その間に受講者に、息の分量のバランスを体得させていく、tとd.gとkもこの方法で。

摩擦音：f,w

前歯で、下唇を軽く触れ、息の送致のバランスで無声、有聲を体得させる。前歯で下唇を噛む必要はなく、軽く触れるだけで良い。

Chの発音について

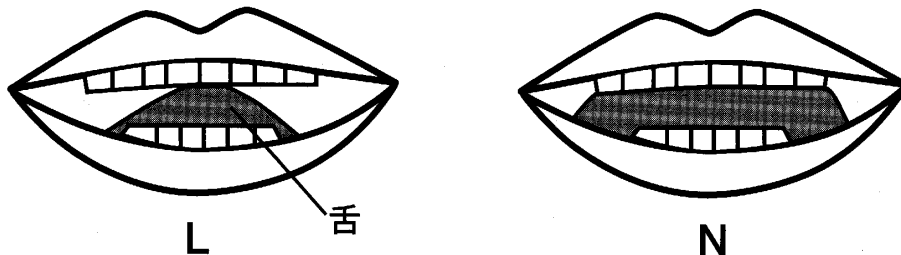
a	}	ch	発音の位置は4 (後方)	例	ach	Bach
o					doch	
u					suchen	Kuchen
i	}	ch	発音の位置は3 (前方)	例	ich	China
e					brechen	echt
子音					durch	
umlaut					München	

sch.ch.jの発音も必ず、深い息のポジションから、トレーニングをする事。これを怠ると、喉に浅い息が、多量にかかり、乾燥し非常に負担が、かかる事となるので、指導者は、それを良く見極めて、進めていく事が、要求される。

鳴音：m. n. l. r ng

mの場合—uの母音で、発音をさせその後唇の中央部を、軽く触れ、その後柔らかく全体に閉じていく。

この間、受講者はuの発声をし続ける事。この方法でmの正しい、響きのある音色が体感出来、語尾のmやmmの発音も美しく自然に共鳴するようになっていく。



lの場合—舌先を細かく緊張させ、前歯の裏の付け根にしっかりと触れ、少し前歯裏を押す様な、感覚を持ち、息を流す事。

nの場合—lと同様の舌の位置だが舌全体を、前歯、側歯の裏の付け根に、すき間なく位置させ、lと同様の息の運動を加える事。

指導者は、lとnの違いを受講者に体得、体感させるため、lを発音させ、指で、鼻を、つまませる。nの場合も同様にし、相違を感知させることが大切である。lは側部から息が、出ていくため、鼻をつまんでも、発音は、そのまま変化する事はないが、nの場合は全体の息が鼻空間に入るため、鼻をつまむと瞬時に音が、途絶えるはずである。

nの場合、舌の位置をしっかりと把握出来ないと、息もれが生じるので、語尾のnの発音が、落ちてしまい、詩の内容が伝わってこないことになりがちなので、注意が必要となってくる。このlとnの具体的なトレーニングに、最適な曲は、F・シューベルトのFrühlingsglaube—春の信仰—で、次の部分を取り出し、Textとして使用されれば、様々な効果と結び付けられる。

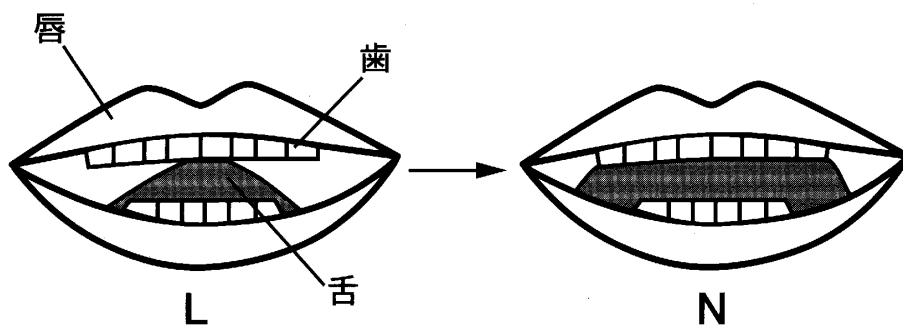
この短いフレーズの中で、lとnが反復され、舌の緊張と弛緩、上下動の運動が、正確に行われるよう、ゆっくりとしたテンポの中、舌の動きを意識させながら、指導していく事。sie schaffen an allen Enden, an allen Endenを二つの子音が続く場合：lnは前述の様に舌先端の緊張と前歯裏の付着が、なされなくてはならないが、次にnが、続く場合は例えば、lächelnのように舌先端の緊張から、前歯裏全面への舌の広がり、舌先端が、前歯裏から解離する事なく続けて発音されなくてはならない。

57 Frühlingsglaube

Ludwig Uhland

op. 20, 2 / D 696

Ziemlich langsam



この為、舌の緊張、弛緩のみのトレーニングを、まず行い、その後、lnの移行を意識を持って出来るよう、導く事が必要とされる。

lの前に子音が来る場合：

例：Schlafen Blumen Klingen

lの後に開口音が、続く場合は、あまり問題が起きないが、lの前に子音が来る場合は、sch (u) lafenという様に子音の子音の間に、母音の響きが、入り込みやすいので、schの発音に、息の重量が、かかり過ぎない様、まず (sch) lafen. (B) lumenのように、前子音をはぶき母音の響きが、安定する様、指導し、その後に前子音を、続けて発音指導される事が望ましい。ドイツ語指導者は一般的に第一子音に多くの息のエネルギーと、意識を集めさせるが、この方法だと、前述した様に、日本人の口腔内の狭窄のため、第一子音に大半のエネルギーを費やしてしまい、第二、第三子音と続くと響きが減少していき、次の母音は、致命的に響きの狭窄と落下を供い、ひいては、語尾の子音は、皆無という状態になりやすく、正しい発音形態を踏襲しているにもかかわらず、文章としての成立が、大変困難な、事態を招く事となる。会話で、使用される折と舞台上で、使用される発音法は、形態は同様であっても、実際に、指導する場合は、大きく発声技術に関るので、指導者は、常に、舞台上で、そのトレーニング方法を、実践し、自身で様々なスチュエーションを、体験し、修整をしていかななくてはならない。

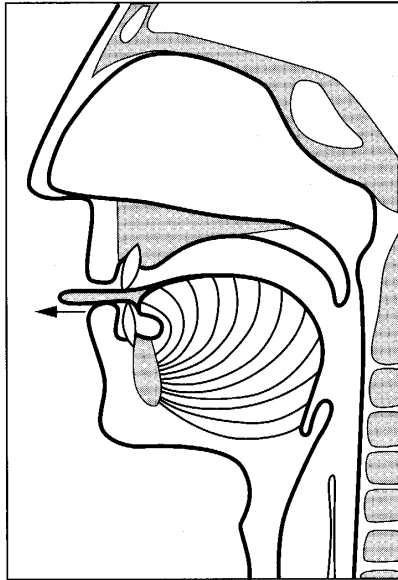
lの場合のみでなく、Freude,tragen等の場合も同様である。

rの巻き舌のトレーニング：

日本人が普段の会話の中でrを巻いて発音する事は、皆無に近いので、(べらんめい調などのセリフなどを除いては)一般の人が、rの巻き舌を自然に出来るという事は、稀であり、例え出来たとしても、舌根と前側面に力が入り、固めて、発音するため、ドイツ人が日本人のrを聞くとur.nrという様に、発音されている様に判断される場合が多いが、これは舌を振動させる為、舌根及び、首前面側部に、Knödelが、生じ、一瞬、rの前にu.nに似た発音が、供ってしまうためである。喉の固さを供わず、舌の脱力と、舌尖端の振動(いわゆる巻き舌)をトレーニングする為に、次の様に順を追って、指導される事が望ましい。

- 1) 舌を唇より前に、先端を細かくして出す。その後、脱力をして舌を口腔内に戻す。これをゆっくり反復する。これは舌の筋肉の柔軟さを引き出すため。
- 2) 舌の先端を唇より (i) の様に出し、軽く前歯で噛み、歯を上下動され、口腔内に、戻す作業を反復する。舌の意識を高める為。
- 3) tdの発音を舌尖端を上下動させ、(たたく様に) 順次早いテンポで、息の送致を供って続け、次にtrの発音を続けてさせていく。rが、まだ巻けない場合も、反復させ、舌の感知力を高め、またこの間tに息の重量がかかり過ぎぬ様、t→rへの方向性を認識させる。
- 4) 以上の方法でも、舌の振動が困難な場合はtreの発音を供いながら、首後方筋肉の脱力を試みながら、前面に首を倒し、また、元の位置に戻す作業を、ゆっくりと意識をしながら反復

する事によって、舌根の脱力と息の送致が、結びついて、舌尖端の振動を感知し、いわゆる巻き舌の発音となる。



1) rのトレーニング方法の図解

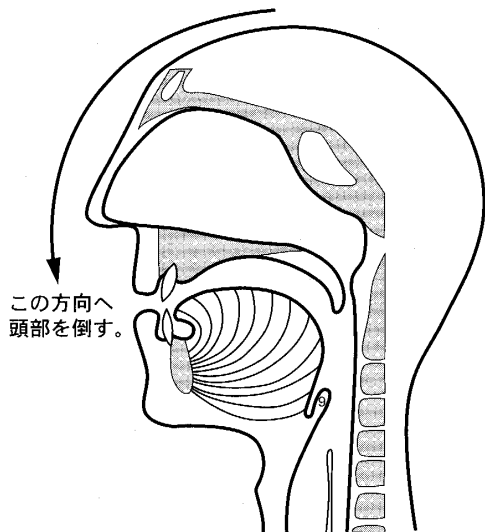
←の方向に舌尖端を細かくして出し戻す

2) 舌尖端を前歯で噛み、軽く歯を上下動する。

3) (2) の部分の舌の上下動の認識

4) 首を前面に脱力し倒し、それと同時にtrの発音を試みる。

5) rの巻き舌が、出来るようになった後は、一語でなく、最低4～5拍の長さを、同音でrを発音し続ける。これを体得するには、深い息のポジションからの送致が、必須条件となっていく。同音でのrが、可能となった場合は、rのみで、一オクターブ、あるいは一オクターブ半以上を、発声練習と同様に、有声で行っていく。



この方向へ
頭部を倒す。

以上のトレーニングを根気よく、反後していければ、舌の意識が薄く、動きの少ない日本人でも、必ず(巻き舌)ドイツ語のrの発音を体得出来る筈である。

ドイツ語のみでなく、イタリア語・フランス語等においても、言語のついでに・その音程で、正しい子音が発音されなくてはならないが、概して日本人は、子音を音程の下からすり上げて、母音のみが、その音程になり、歌唱されることが多いが、この事が、言語の不明確さをもたらす原因ともなっているため、留意しなくてはならない。

Textとして、シューベルトのHeidenröslein一野ばらの一節で、三度繰り返される、Röslein,Röslein,Röslein rotの個所は、語尾のnが、鼻空間に完全に共鳴し、舌も正確な位置を得た場合は、次のrの子音も舌の無駄な動きをする事なく、振動音へと導く事が、出来、Oの暗長母音も、明母音のOになる事なく、自然で美しい発音へと導かれていく。

間での響きが、安定してきたら、上記の順序で、始めは同一音でmの響きが、つぶれてしまわないよう、ゆっくりと反覆し、次に、下降音階を使い、リズムックに、発声をしていくと語尾にmmの発音が、来た場合も、自然な発音へと序々に導かれていく。

例：komm! Stimme

Summen Mannheim

二重母音の処理：au äu ai ei

au Haus auch

eu 例 äu：Häuser (複数形)

Träume (複数形)

ai：Mai Saiten

ei：Zeit

eu：eure Freude

日本語で表記する場合、アウ、オイ、アイなどとなるが、発音する折に、注意をしなくてはいけない事は、喉で、母音色を作らない様に、細心の注意を払う事である。

auは、aの母音の位置から、顔面の頬の部分の筋肉をuの唇の形態に移行するのみで良い。この間aの発声を続けていく。

a→uの頬の筋肉の移行を、喉で母音の変化をせずに、続行する事。

au euの場合：oの発音をしながら、舌尖端を下部の歯の付け根に軽く押し付けるようにiの発音に移行する。まず、oの舌の位置から、発声をせずに、舌の動作のみで、iに移行するトレーニングをした後、発声を伴い反復練習をし、その後例に上げた様に、言語として、発音を試みる。正しい発音は、オイ、というより、オエに近い発音となる。au,euの場合二番目の母音を、決して先に喉で作らない事が大切で、これを怠ると、二重母音後の子音の落下を招き一言のみでなく、続くフレーズにも様々な、障害を引き起こす事となる。

eiも母音がaになるだけで同様のトレーニングで良い。

ドイツ語の発音について述べていくと、あまりに多くの約束事や、ルールがあり、糸がからまっていく様に感じられるが、一つ一つの方法を時間が掛かるようであっても、辛抱強く、積み重ねてトレーニングをしていかないと、スムーズで自然な美しい発音になる個所と、発音の落下を生じる個所が、混在してしまい最終的には、文章としての成立が困難となってくる。歌唱の場合は、広い空間でなされる為、この現象が、より著しいものとなり、音楽表現も、大幅にこの事により、損われる結果となるので、指導者は、より辛抱強く、あせらず実践を供いながら、指導していく事が、望ましい。

今回は、全ての発音について述べず、典型的な場合のみについての記述であるが、最後に発音のまとめとして各母音子音の例を、表記し、これを一つの参考として、声楽のトレーニングと同じ様に、発音練習を試みて頂けたらと思う。

a) a : 短母音 Nacht. Aktion
 a 長母音 Damen Sagen
 aa 長母音 Saal Aal
 ah 長母音 fahren Ahnung
 ai (二重母音) Mai Saiten
 au (二重母音) Haus Augen
 a 短母音 Gäste Gänse
 a 長母音 Mädchen Käse
 ah 長母音 Ähren mähen
 au 二重母音 Häuser Träume
 b (無声音) Knab herab
 b (有声音) Bach Becher
 c ts,tf,k.の発音
 Celle · Cello · Cafe
 ch 前面発音 ich.echt.China.Mädchen.durch
 ch 後方発音 Bach:doch:suchen Buch
 ch(k) Charakter Christ wachsen
 ck(k) Glück Ecke
 d 無声音 : Leid Abschied
 d 有声音 : Doppel dabei
 dt 無声音 : Stadt
 e 短母音 helfen denn
 e 長母音 ewing Ehe
 eh 長母音 : gehen,verstehen ehemals
 ei 二重母音 : zeigen,weinen
 eu 二重母音 Europa Freunde
 f 無声子音 flattern Familie fassen
 g(g) Gott geben Gut Gang
 g(k) Sing, Hag,Zweig
 ig(ig) ewig traurig
 h hold heilig Himmel
 母音→h sehen fahren stehen
 二重母音→h Verzeihung weihen
 i 短母音 Bitte immer

i 長母音 Bibel
ie 長母音 ziehen tief Liebe
j(j) jung jeder
k(k) König Kind Käfer
ck(k) Glocken backen
kn Knie Knospe
l Leib lieben lösen
m Musik München kommen summen
ng Frühling Ausgang
nk Frankreich trinken
ng(ng) ungeru Angesicht
ng(ng) Ungar
O 短母音 kommen offen doch
O 長母音 schon rot
Oh 長母音 wohnen Sohn froh
Ö 短母音 möchten König
Ö (長) Söhne Höhe
P(p) Post Patenkind
pf Pflanzen Kampf
ph Phöbus Physik
ps Psalm Pseudonym
g kw Qual Quelle
R richtig recht rot
Rh Rhein Rhythmus
s(s) Glas ausgehen
s(z) singen Sonne Sohn
sch(f) schlafen Taschen schimmer
sp(jp) spielen Sport Spanien
sp(sp) Hispanien Aspekt
st(jt) Stein Strabe Stich
st(st) Kunst Geist einst
ss(s) süß wissen Kuss
sz(sts) Szene

ß (s) 21世紀より公文書上では使用されなくなった。現在ではssと記される。groß aß

t(t) Tat trinren Ton
ts(ts) Staatsoper
tsch Deutsch Matsch
tzsch Tscheche
u(短母音) Punkt dunkel
u(長母音) Kugel Blume super
uh長母音 ruhig Stuhl
ü短母音 Küche Künstler
ü長母音 süß üben Grün
üh長母音 Bühne Frühling
v (f) Veilchen viel Vater
v(V) Vokal Variation
W wv Welt wissen Wohnung
x ks Xylographie
y短母音 System (uウムラウトと同じ)
y長母音 Elysium Typ
y(j) Yacht (Jachtとも記す) yen
z(ts) Zug ziehen Zoo

Glottisschlag 声門閉鎖音

母音で始まる言語の第一音を、声門を軽く閉じた状態で発音し直すように発声するもの。

例 ○Bin/ich ×Binich ○Abend/undxAbendund 前の言語の語尾子音が、次の母音と決してリエゾンをしない事、この事は、ドイツ語発音上、大変に重要な問題点であるが、以前より、ドイツ語発音は全体的に、柔らかくより自然になってきているので、強調しすぎない様に、指導する事が大切である。また発声上においても、首の筋肉の硬化を、招かぬよう注意が必要である。

以上、特徴的な典型のみを記したが、今回は単に、各子音、母音の基本概念を述べるに、とどまったが、言語の様々な要因について、また、文章上の抑揚、あるいは、各語のアクセントの重さと軽さのバランス、どのような場面で、語られるか、等、数限りない問題点があり、指導者は、どのような表現として、発音させるか、常に柔軟に、対処していかななくてはならない。

同じ文章であっても、その要求されている場面が違う場合、当然、発音の色彩感も、変化していくはずであるから、指導者は論理のみに拘泥せず、様々な、バリエーションを持ち、受講者に接して、正しい認識とトレーニングを、指導されるべきと、演奏者としての体験と、長年の発音法の指導者として、思うところ大で、今回のテーマに取り組んだ次第である。

参考史料

- ◎ドイツ国立シュトゥットガルト音楽大学のProf. Uta Kutterの授業内のText
- ◎上記の講師、故Carl Davis氏のMethode
- ◎舞台語発音指導者 Christa Hummel氏のMethode
- ◎ショパン発行 歌うドイツ語ハンドブック
三か尻正 著
- ◎小学館発行、独和大辞典